

# 「炭」と大井 ①

江戸時代の煮炊きや暖房を支えた燃料は、薪と炭であった。この燃料は再生可能な生態系の中で農山村から提供された。小氷期の異常気象等で飢饉や疫病が流行し、経済は疲弊、徳川幕府の財政は窮乏していった。幕府は打開策として享保・寛政・天保の改革を打ち出した。みねおか地域の炭生産もこの中で本格化していったのである。

この頃の大井の姿を保里家や大井に残された古文書の中に記録されたものを紹介する。これは直面している現代の課題ともつながることが次第に見えてきました。

文責：大井里山保全協議会 事務局長 芳賀裕



# 時代背景を考える①

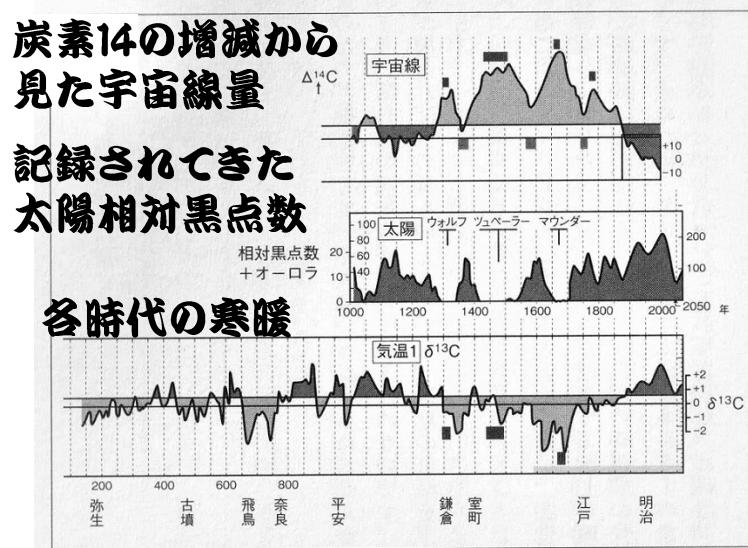
江戸時代は世界的な**小氷期**(14世紀から19世紀半ばまで約500年)の中でした。(右図は歌川広重の江戸百景・深川)小氷期では、寒さ対策として家の構造も変化した。

部屋は床(畳)と天井、襖(ふすま)で仕切られ、囲炉裏・火鉢等で暖を取るようになった。上質無煙の「炭」は室内で使用できた。「薪」「炭」は当時のエネルギーの中心であり、石炭・石油・電気に変わるまで地方が都市部を支える構造であった。農家の収入の半分が農閑期で作られる「炭」であった時期もあった。江戸近郊では炭焼きを專業とする農家も現れた。それは「地下資源」に依存しない「循環型資源」を最大限に活用した時代でもあります。



# 時代背景を考える②

温暖な気候から一転させた小氷期は、太陽の変動・地表に到達する光の量の減少等(下記参照)によるものと思われる。太陽活動が低下したマウンダ-極小期には墨田川も何度か氷結した。これが自然災害・飢饉・疫病流行の背景でもあった。



気候変動の主要な要素: 太陽活動の活発度・地球磁場と宇宙線・天体力学・火山活動・温暖化が入で、その相互関係は複雑で、主として「**炭素14**」の分析を通じた福井県年縞博物館の研究で次第に過去の気候変動が明らかにされてきている。

左図は、太陽の黒点・宇宙線の増減と日本の気候変動を歴史的に見たものであるが、鎌倉時代から幕末まで寒い期間であったことが見て取れる。この期間に発生した富士山・浅間山等の火山の噴火等も一定期間日光を弱めたのである。

A: 宇宙線照射量 (Stuiver and Braziunas, 1988)、B: 太陽の活動度 (Eddy, 1988)、C: 炭素同位体から推定した気温変化 (名古屋大学・北川浩之准教授のデータより)

東工大・丸山茂徳教授が引用した名古屋大学・北川浩之氏データ

# 寛政の改革とみねおか牧

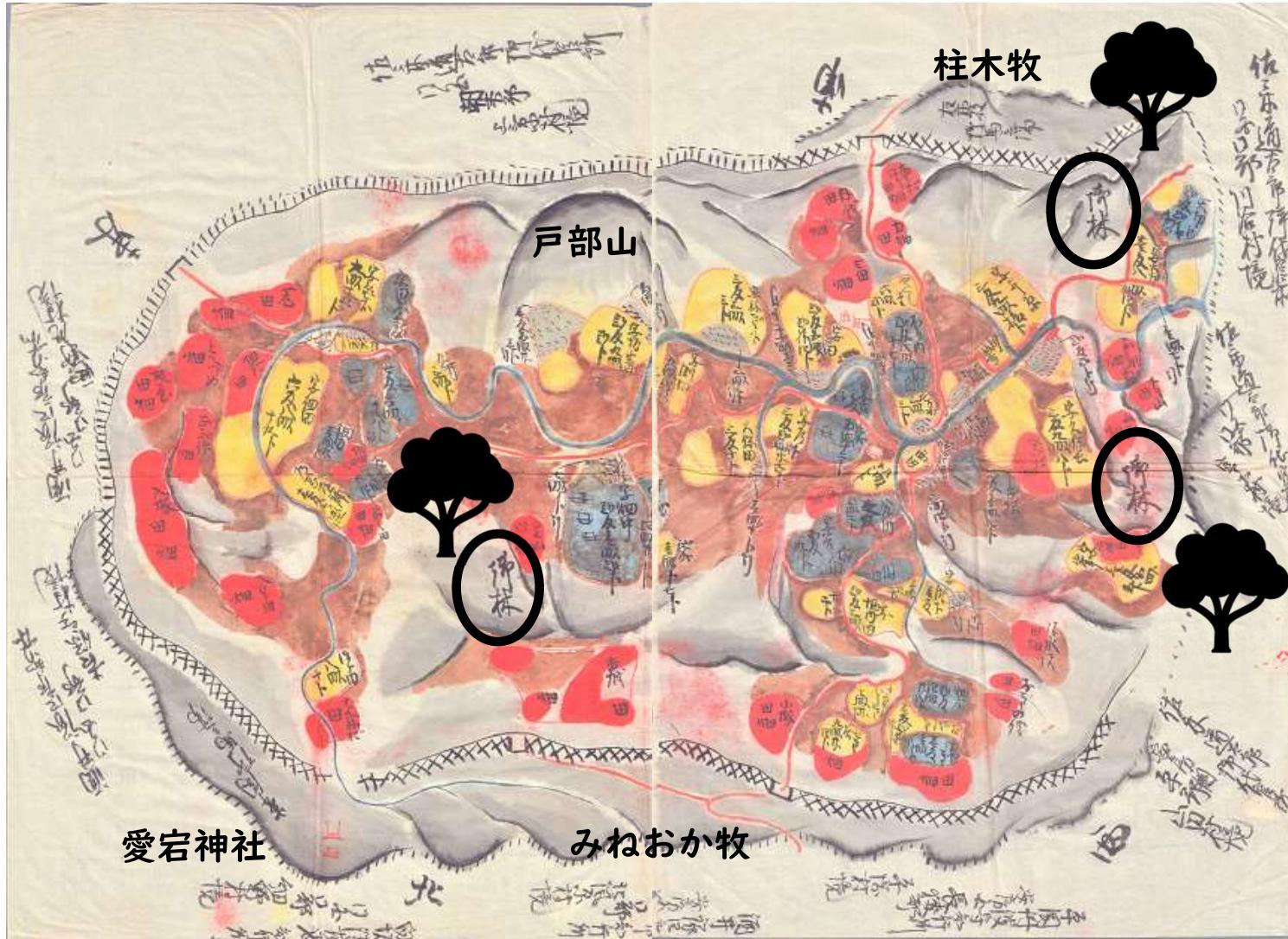


寛政の改革(1787～1793年)の中で  
幕府直轄牧を担当した岩本正倫(まさとも)が  
みねおか等で実施したのは、「無駄の廃止」と「資源の活用」  
での財政再建であった。

資源の活用策として、

- ① 白牛母子を江戸に移送、「白牛酪」製造と販売
  - ② 木を「炭」にして江戸に運搬・御用商人に販売
- その炭の原材料は「牧内の林」と天領にある「御林」  
等から調達・製造・炭俵製作から集積所までの運賃まで  
前金で賄うもので、地元には安定した収入源となった。
- 

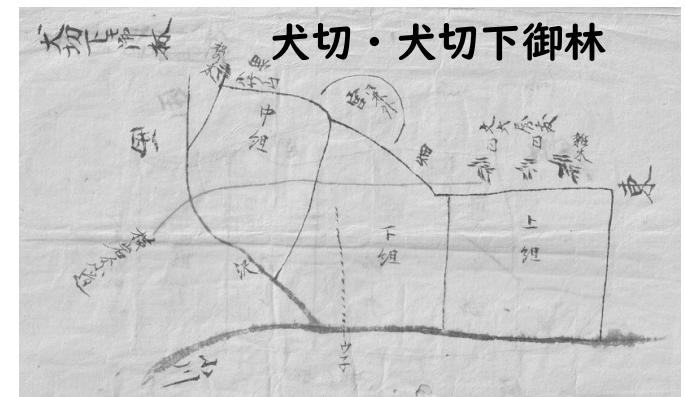
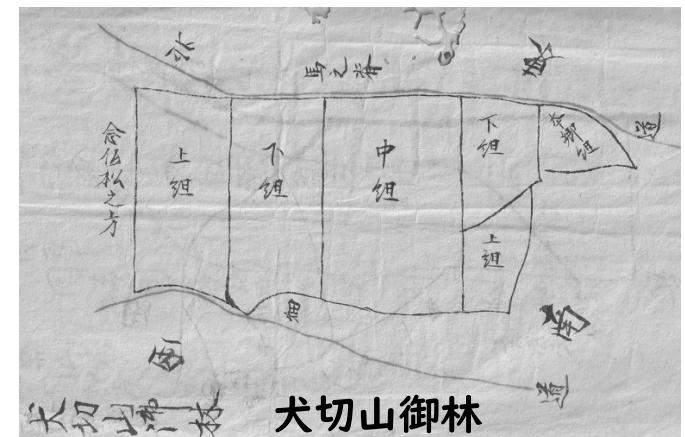
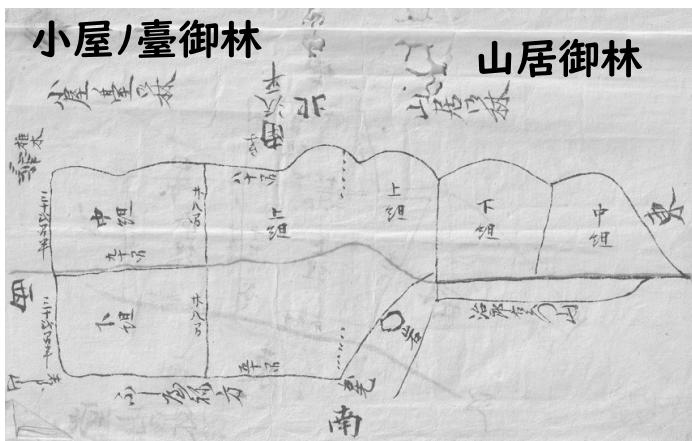
# 江戸後期の大井地区の御林（おばやし）



御林（おばやし）は幕府直轄林を指し、大井の古地図には3か所記されている。周辺の代官名が佐々木道太郎・平岡丹波守・大竹左馬太郎・小川達太郎等であることから、1864年前後に名主・田之輔（保里昭平）が描いたものと推察する。寛政の改革以後は牧士のもとで育成・管理された。

# 大井地区の御林の組別領域

3か所の御林は、山居（2か所）犬切（3か所）堂山（3か所）の計8カ所、面積は6町5反3畝に及んでおり、大井の四組がそれぞれの領域に分けられ、伐採が管理されていた。下図は文久2年（1862年）の名主である田之輔（後の保里昭平）が記録した絵図である。



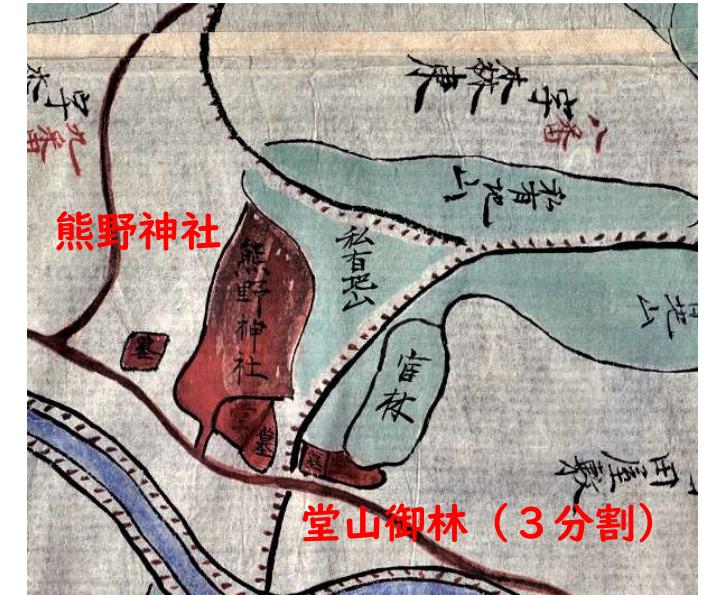
この他にも百姓持ちの私有林が数拾町歩あり、農地だけでなく、林業も大きな収入源であったと推察する。

# 明治初期の地図での御林（官林）



明治になると御林は官林と表記される。上記領域が現在の大井区有林位置。

明治7年3月2日  
戸長：保里昭平  
副戸長：榛澤太市



牛馬飼料用の村持公有林場や屋根の萱（かや）育成用の萱林も記録



# この時期の大井の人材について

里見改易後の大井の要職は九州・筑前出身の修験者・**堀川延寿**の子孫を中心に受け継がれてきた。徳川の天領になつた後には、村内の子弟への教育も熱心で多くの人材を輩出してきた。

延寿の後妻（大山寺別当の娘）との子である**熊蔵**が徳川方の検地後に名主になり、分家・独立、その孫が代官として「**遠藤武右衛門**」として苗字が許されたのが宝永6年（1709年）。以後、その子孫が名主又は牧士として継承されていく。

延寿の本家筋は、農林業を中心にして生計を立て、学問を重んじ、地域の要となつた。江戸との関係も強く、4人の医者を輩出している。本家筋が苗字を「保里」にするのが、明治3年の平民苗字許可令以降で「**保里昭平**」が戸主の時になる。貴重な資料が大井に残されたのは、保里昭平氏の能力によるものが大きい。